

あ と が き

公益財団法人中央教育研究所
所長 三光 穰

第41回「東書教育賞」を受賞された先生方、誠にありがとうございます。心よりお祝いを申し上げます。

審査機関である中央教育研究所から、今回の応募・審査に関するご報告とご挨拶を申し上げます。

中央教育研究所は、1946（昭和21）年に東京大学の海後宗臣先生が中心となって設立された民間の教育研究所で、今年が設立から80年目の節目の年になります。設立の年に「アメリカの新教科書に関する展覧会」を開催、翌年には地域カリキュラム「川口プラン」を発表し、戦後カリキュラム運動の中心的な存在になりました。1953年には文部省所管の財団法人として認可を受け、その後も教育実践に関する調査研究を続け、2012年に、内閣府より公益財団法人としての認可を受けました。

現在、研究所では、公益目的事業として、「今日的な教育課題に関するシンポジウムの開催」事業、「教育に関する調査研究」事業、「教科書研究に対する奨励金助成」事業、そして、「東書教育賞」の論文審査および論文集の編集を行っています。研究成果をまとめて教育現場等に発信する研究報告は、1973年に第1号を発行し、本年3月には、第107号『生成AIの教育利用』と、第108号『家族と学校の関係から教育を考える』の2冊を発行予定です。

さて、第41回「東書教育賞」は、昨年10月20日に論文応募を締め切り、第40回と同じ154編の応募をいただきました。一昨年は125編でしたので、昨年に続いて多くのご応募をいただいたことは、大変ありがたいことだと受け止めております。

厳正なる第一次審査を経て、12月11日に最終審査委員会を開催し、小学校部門、中学校部門の各賞を選出していただきました。

応募総数154編の内訳は、一般部門が135編（88%）、ICT活用部門が19編（12%）となりました。学校種では、154編のうち、小学校89編、中学校57編、その他8編で、論文内容での小・中の比率は6対4となり、昨年度（小・中の比率は7対3）と比べて中学校の占める割合が増加しました。

「小中別・教科領域別応募数」の傾向を見ますと、小学校では、国語が16編、算数が14編、学校経営・学級経営が13編と続いています。中学校では、社会が10編、理科が9編、外国語（英語）と学校経営・学級経営が各6編と続きます。

論文タイトルについて際立った特徴は見いだせませんが、「探究」あるいは「探究学習」をタイトルに含む論文が8編（中学校最優秀賞の山本寛之先生と、優秀賞の高野健人先生の論文タイトルに「探究学習」が含まれています）あり、「自由進度学習」をタイトルに含む論文が4編ありました。また、前回初めて「生成AIの活用」に関する応募論文が2編ありましたが、今回は4編へと増加しています。

応募の形態ですが、今回は「個人」での応募が139編、「学校・グループ」での応募が15編で、「個人」での応募が9割を占めています。

応募の地域についてですが、北海道から九州、海外の日本人学校を含むさまざまな地域からご応募いただきました。最優秀賞は、今回中学校の1編のみ、山本寛之先生が受賞されました。「外国語科・総合的な学習の時間」での応募で、3年間にわたって横断的なカリキュラム開発を行った実践に関する論文が審査委員会で高く評価されました。

最後に、ご応募いただいた方の年齢層をご報告いたします。

年齢層は、20歳代が10名、30歳代が55名、40歳代が48名、50歳代が27名、60歳以上が14名でした。20歳代の応募が前回から減っていますが、概ね、各世代からまんべんなくご応募いただいています。

多くの先生方に支えられ、東書教育賞が40年以上にわたって回を重ねることができました。誠にありがたいことです。今後も、現実に根ざし、将来を見すえたご実践が、数多く寄せられることを願っています。

以上、第41回「東書教育賞」の応募状況に関してご報告いたしました。次回、第42回の「東書教育賞」でも、多くの先生方のご応募をお待ちしております。